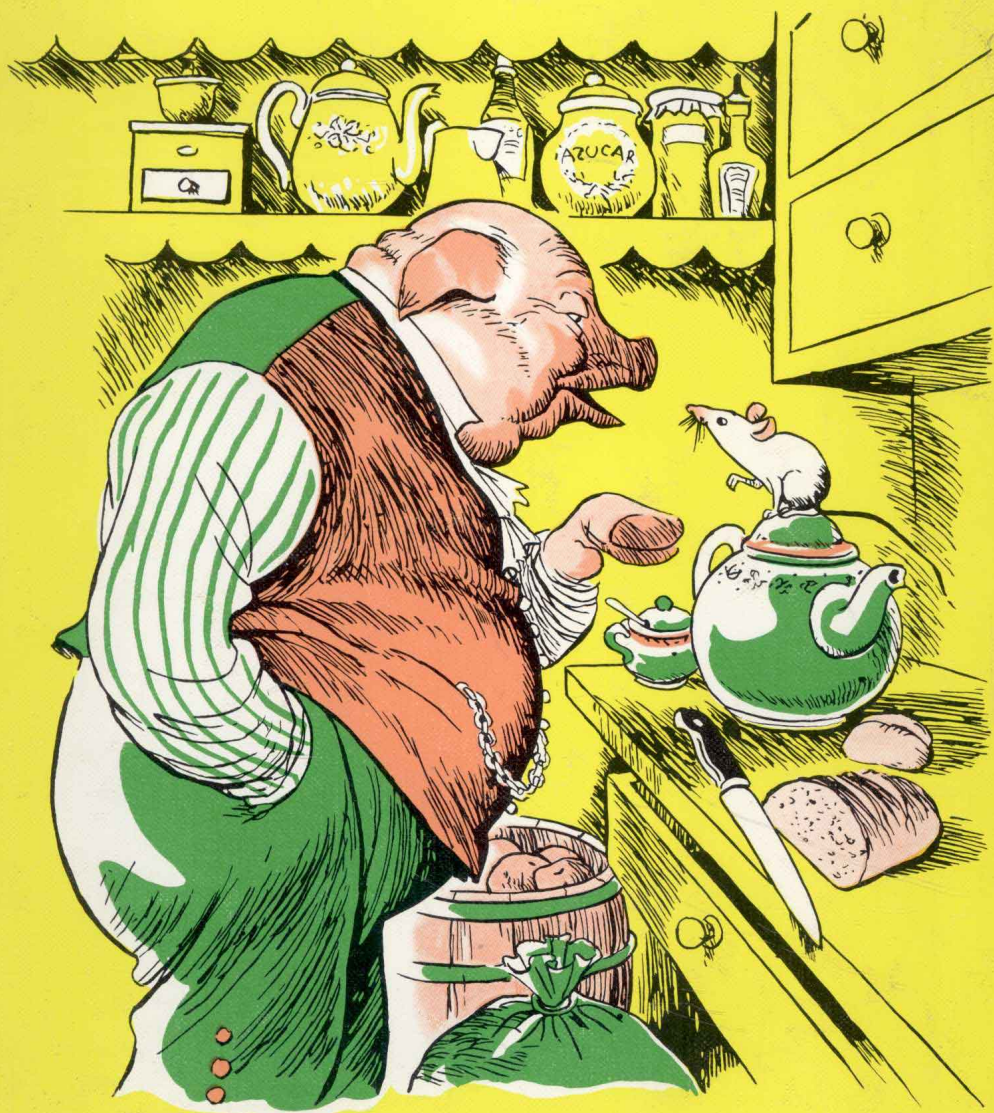


ポルコさま ちえばなし

ロバート・デイヴィス文 瀬田貞二訳



岩波書店



ポルコさま ちえばなし

—— スペインのたのしいお話^{はなし} ——

R. デイヴィス^{ぶん}文

瀬田^せ貞二^{たていじやく} 訳

F. アイヘンバーグ^え 絵



岩波書店

930 ポルコさま ちえばなし

ロバート・デイヴィス文

瀬田貞二訳 F・アイヘンバーグ絵

岩波書店 1964

154 p. 23 cm (岩波おはなしの本)

小学1～3年

Davis, Robert: Padre Porko—The gentlemanly
Pig—, 1939.

岩波おはなしの本

ポルコさまちえばなし

定価一六〇〇円
(本体一五五三円)

一九六四年七月一五日 第一刷発行
一九九三年一〇月五日 第一六刷発行

訳者 瀬田貞二
きたていじ

発行者 安江良介

発行所 101-02 東京都千代田区一ツ橋三ノ五ノ五
株式会社岩波書店 電話〇三・三三〇・二〇〇〇(案内)

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

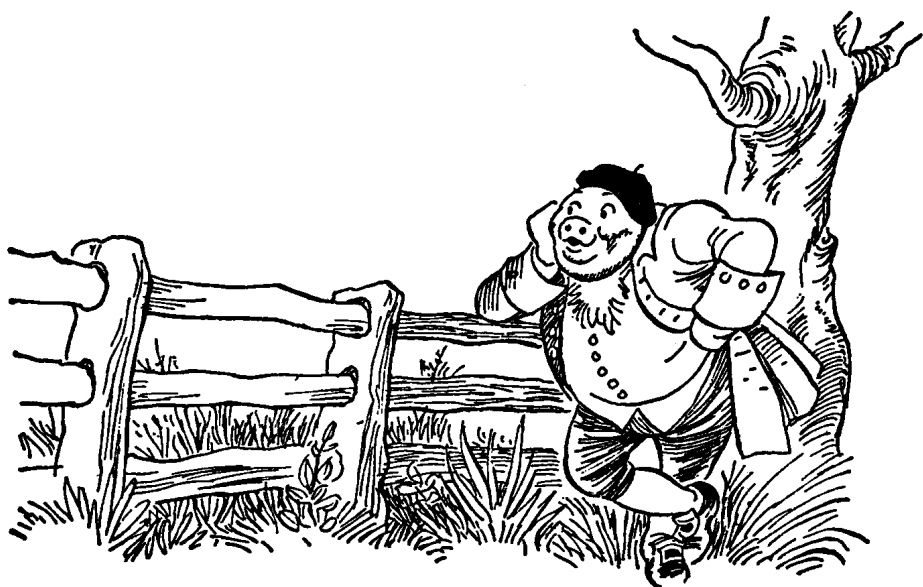
製本 牧製本印刷株式会社

表紙・口絵・見返・箱印刷 錦印刷株式会社

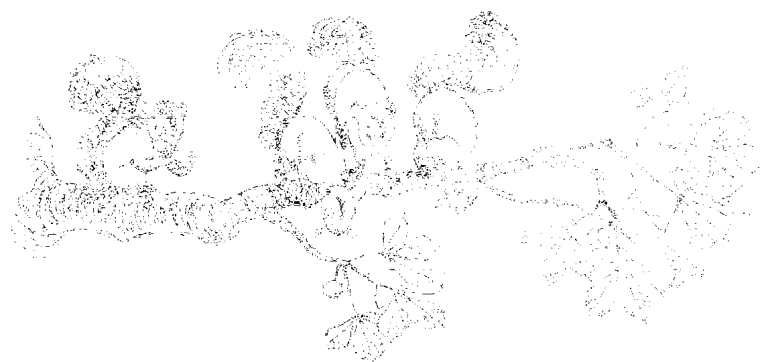
Printed in Japan

ISBN4-00-110308-7

もくじ



ボルコさまのこと……………	9
將軍の馬……………	13
セレスチーナのぎんのコーヒーわかし……………	30
ひとのことはを話す犬……………	49
おもいしつたいじめっ子……………	67
フェリクスじいさんの金ぶくろ……………	83



パブロのガチョウ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105

ふざけやのリス、一本ゆび・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120

まねかれないできたおきやく・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134

訳者のことば・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153



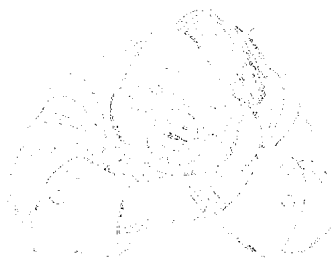
將軍の馬

ポルコさまちえばなし



瀬田貞二 訳
ロバート・デイヴィス 文

ポルコさまのこと



むかしむかし、まだ、にんげんにあまりちえがなく、けもののほうにちえがたくさんあったころのことです。そのころ、生きているものは、なにもかもいっしょにくらしていました。そして、にんげんのなかまをうまくとりしまるのが王^{おう}さままで、けもののなかまをおさめるのが、ブタのポルコさまでした。

ポルコさまがスペインにきたのは、ローマ人^{じん}やアラビヤ人^{じん}がせめてくるより、ずっとむかしのことで、そんなけんかずきの人たちがいなかったころのことなのです。そしてポルコさまは、スペインがだいすきになりました。うつくしいひろい野原^のや、たかい山のすみきった空気^{くうき}や、ながれのはやい川や、カシやマツの木の森や、きしべをあらう海^{うみ}が、すっかりすきになりました。

した。それからずっと、ポルコさまはスペインにすみついて、スペイン人の大のなかよしになったのです。

わたしのおばあさんのひいおばあさんが知っていたあるおじいさんは、ほんの子どものときに、ポルコさまをほんとに見たことがあるそうです。それは、オリーブの林のなかで、月のひかりにてらされたポルコさまを、ほんのちらりとみかけただけなのですが、そのからだはおふろからあがったばかりの赤ちゃんのように、どこもかもバラいろでした。そして、金ボタンのついた、みどりいろのビロードのうわぎをきて、足をびたりつつむ、みどりいろのビロードのズボンをはいていました。そして、あたまたに赤いベレーぼうをかぶり、足には赤いくつをはいていました。そのおじいさんはそういうポルコさまを見たというのです。

どこか、とおいとおい山の上に、ポルコさまのうちがあります。やさいばたけのまんなかに、みどりいろの家がきちんとたっています。げんかんのまえには、えだをひろげたカサマツの木が一本はえていて、そのかげに、小さなテーブルといすをすえて、

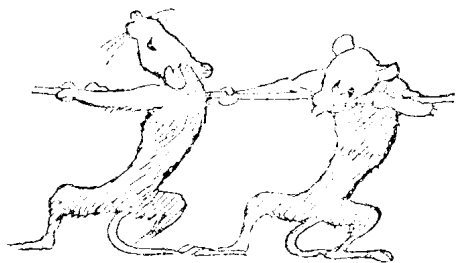
天気^{てんき}のいい日には、ポルコさまが、こしかけています。ハリネズミのおばさんが、ポルコさまの家^{いえ}のせわをしています。おばさんは、すすはらいをしたり、ニンジンやタマネギのスープをこしらえたり、四はこもあるミツバチのせわをやいたりします。ポルコさまは、あらゆるものともだちで、だれでもかれでもかわいがりますが、いちばんすきなものは、やはりブタさんですから、ハチミツと、ニンジンのスープです。

スペインでは、にんげんの子でも、どんなけものでも、ポルコさまにたすけてもらいたいとおもえば、きつとたすけてもらえます。だれでも、とてもこまることがあった時は、できるだけしずかなところへいって、心^{こころ}をこめて、ポルコさまにおねがいすれば、いいのです。心^{こころ}のなかで、「ポルコさま、ポルコさま、どうしていいかわかりません。どうかどうか、おいでください。おまちしています。」というのです。すると、ほら、ポルコさまが、やってきます。もうだいじょうぶです。あなたがねがえば、どんな生きものでも、そのねがいごとをポルコさまへとりついでくれます。ハチでもハムシでも、モグラでもコウモリでも、とりでもキツネでも、あなたのねがいをポルコ

さまにつたえてくれます。みんな
ポルコさまのともだちですから、
あなたのねがいをききつけると、
あなたのともだちになってくれる
ですよ。そしてポルコさまがお
いでになってあなたのなやみをと
いてくださるのです。（ポルコさ
まのことをスペインのあるおばあ
さんが、そうかたりました。そし
て、これから話す物語は、そうい
うポルコさまのお話です。）



しょうぐん うま
将軍の馬



小雨^{こさめ}が、しとしと、ふっている夜^{よる}でした。あまだれ
が、木^この葉^はのさきから、ぼとぼと、ぬかるみへおちて
います。かぜがカサマツの木をゆすぶって、ポルコさ
まの家^{いえ}のまどに、えだをうちあてています。こういう
天気^{てんき}では、どんなひともけものも、そとへでたがりま
せん。そらをとぶものも、森にすむものも、地^ちのそこ
にひそむものも、まじめなものはみんな、ぐっすりね
むっています。

ハリネズミおばさんは、晩^{ばん}ごはんのあとかたづけを
すませ、しっぽでいろりのはいをかきならし、ポルコ
さまのネルのねまきをあたためておいてから、リンゴ
の木の下にあるじぶんの家^{いえ}にかえっていきましました。
いろりのまえで、ポルコさまは、うとうと、いねむ

りをしていました。今夜は、すてきなエンジンのスーパを三ばいもたべたものですから、とてもいい気もちで、ときどきおなかをさすっています。マツのえだがさらさらなる音も、あまだれがぽとぽとおちる音も、うっとりするようにきこえます。それでは、パイプで一ぶくたばこをすってから、ねることにしようかと、ポルコさまはかんがえていました。

するとそのとき、とんとんとん、おもての戸口をたたく音がきこえました。

「これはこれは。」ポルコさまは、びっくりしてさけびました。そして、赤いスリッパをはきながら、「こんな晩に、そとにでかけるなんて、いったい、だれだろう。よほどこまっているものにちがいない。」と、いいました。

「どなたかな。」と、ポルコさまはたずねながら、よくにおいのわかるはなさを、かぎあなにあてました。ポルコさまは、にんげんなら目で見たり耳できいたりしてわかることが、はなのさきでわかるのです。

「アントニオです。將軍家のうまやばんです。」